

研究ノート

パールシー社会における「保守派」と「改革派」の対立構造

香月 法子*

Orthodox versus Reformist: The Structure of Contention in the Parsi Community

KATSUKI Noriko

Abstract

Presently, Parsis who have followed Zoroastrianism for generations are suffering from a dwindling population due to a falling birthrate, aging and increasing inter-marriage. On the other hand, the supposed number of converts and would-be converts is increasing around the world. Some say that they are approximately 2 million in number. However, this is not good news for Parsis, especially for orthodox Parsis. In the Parsi community, the orthodox and the reformists, who have shown some understanding of the situation, are in fierce conflict with each other over their attitude towards converts and their inter-marriage with Parsi women. During the 18th century, the Parsis experienced a series of community divisions, which led to a decline in their religious authority. Consequently, while their knowledge about Zoroastrianism has been affected by European Zoroastrian studies, the establishment of their own Zoroastrianism was halted. The sequence of events in the community has disrupted the building of a Parsi identity. The present conflict in their community represents this disruption.

要旨

現在、古来より代々ゾロアスター教を信奉してきたインドのゾロアスター教徒、つまりパールシーが少子高齢化や女性の外婚増加等による、人口減少に悩まされている一方で、改宗によって、様々な背景を持ったゾロアスター教徒が世界中に200万いるともいわれている。しかしパールシーにとって、このような教徒数の増加は、決して手放して喜べる話ではない。それどころか改宗者やパールシー外婚女性に対する態度を巡って、「保守派」と「改革派」に分かれ、パールシー・コミュニティを二分する論争に発展している。これは18世紀における度重なるコミュニティの分裂によって宗教的権威が衰退してしまったことで、彼らのゾロアスター教はヨーロッパの研究成果の影響を大きく受け、彼ら独自のゾロアスター教の確立が中断されたため、彼らのアイデンティティ形成に混乱が生じ、それが今になって「保守派」対「改革派」という対立構造となって

* 中央大学政策文化総合研究所準研究員

- ・ 2004、「現代のゾロアスター教と改宗問題」、『オリエント』、第47巻第1号、113-126頁。
- ・ 2009、「ボンベイ・パールシー・パンチャーヤット選挙と2008年11月のムンバイ連続テロ」、『地域文化研究』、第12巻、150-164頁。

表れているのである。

1. はじめに

現代では、インドのゾロアスター教徒やイランのゾロアスター教徒などの他に、北はロシアから南はニュージーランドまで、ゾロアスター教徒と自称する人々は世界中に散在している。これまでに、これらの人々を含めた世界のゾロアスター教徒人口は調査されたことがなく、正確な規模は不明である。1976年のボイス (M. Boyce)¹⁾ の書で述べる世界のゾロアスター教徒人口の概算は約12万人で [Boyce 2001: 226–227]、分布地域もインド、イラン、北米、欧州、豪州そして東南アジアとなっていた。しかし2000年の世界のゾロアスター教徒人口は、270万人と称する説もある [Mondegari 2006: 3]。このように20数年間という短期間で、推定270万人にもふくれあがった世界のゾロアスター教徒人口は、それまで一般にゾロアスター教徒だと見なされていた人々に様々な影響を与えた。

まずボイスの12万人に含まれるゾロアスター教徒とは、次の人々によって構成されていた。つまりササン朝滅亡後の10世紀頃からインドへ移住したゾロアスター教徒、つまりパールシーと、ササン朝滅亡後もイランのヤズドやケルマーンなどに留まり、パールシーと連絡を取り合ってきたイラン系ゾロアスター教徒たちである。インドへの移住と互いの交流は、断続的に続いていたものの [Dhabhar 1999: li–lxviii]²⁾、現在ではパールシーとイラン系ゾロアスター教徒の間に、親戚関係は殆どなく、宗教的慣習においても違いが見られる。特に19世紀中頃以降、移住してきたイラン系ゾロアスター教徒を、パールシーはイラニーと呼び、自分たちとは区別している³⁾。婚姻関係によって、どちらかに吸収される人々もいないわけではないが、それによって両コミュニティは再統合して行くどころか、文化的相違によって益々分裂していく傾向が見られる。特に言語とゾロアスター教への改宗者に対する態度の相違は、彼らの再統合を阻む最も大きな要因となっている。なお2001年に行われたインド国勢調査によれば、パールシーはインドに7万人弱と言われている [Karkaria 2004: 11]。一方のイラン系ゾロアスター教徒については、明確な数は不明である。彼らは主にムンバイやグジャラート州各地の他に、イラン、パキスタン、欧州、北米、豪州などに居住している。

ゾロアスター教研究が欧州で始まったきっかけは、デュ・ペロンがパールシーから聖典の写本を購入したことにある [Kanga 1876: 33–40]。その後、パールシーについての研究は19世紀後半からムルトン (J. Moulton)⁴⁾ らが、イラン系ゾロアスター教徒については、学術的な研究ではボイス (M. Boyce) がその嚆矢となった。その後に続くヒネルズ (J. Hinnells)⁵⁾ においても、近代のゾロアスター教研究の対象は、上述のパールシーとイラン系ゾロアスター教徒であった。加えて彼ら以外の生きたゾロアスター教徒に関する情報が当時はなかったことから、彼らが彼ら以外のゾロアスター教徒について具体的に考える必要性のない状態が1980年代頃まで続いた。彼らにとってゾロアスター教徒といえば家族や親戚、あるいはインド、イランの同胞に限られており、ゾロアスター教は彼らだけの宗教だった。このような彼らが信じる現実と、それを裏付けるような欧米におけるゾロアスター

教研究の成果から、12万人というゾロアスター教徒人口は、導きだされたのである。

一方、1980年代頃から、従来のゾロアスター教徒たち以外に、ゾロアスター教を信じていると称する人々が出てきた [Cooper 1983: 2-7]。中には、これまでのゾロアスター教徒たちが伝統に則って行ってきた入信式に倣って儀礼を行い、改宗したとする人々も出てきた⁶⁾。彼らはパールシーに改宗ゾロアスター教徒などと呼ばれている。このような人々は先祖がゾロアスター教徒だったとされる人々と、そうではない人々に分けられる。先祖がゾロアスター教徒だった人々とはイランやタジキスタンなど、中央アジアのイラン系民族である⁷⁾。その中でも本土のイラン人は、数百年前の先祖はゾロアスター教徒であったと主張したり [Jafarey 2007: 38]、あるいはパフラヴィー王朝においてイスラーム以前の文化が注目されたことから、懐古主義的にゾロアスター教に再び戻りたいと考えていたりする人々である [Amighi 1990: 225-231]。すでに入信式を行ったものもいるが、大多数はゾロアスター教をイランの文化的遺産と考えるだけで、信仰の対象とは区別している。彼らはイラン、カナダそして欧州などに居住している。

また中央アジアに点在するイラン系民族の中にも、2、3代前、つまりソビエト政権による支配を受ける以前までは、先祖はゾロアスター教徒だったと主張する人々がいる。彼らの中にもイラン系の改宗ゾロアスター教徒同様、入信を望んでいた、すでに入信儀礼を行ったりしたものがある。パールシーの中には彼らを改宗者と見なすか、パールシーと同じ入信者と見なすかは、これから述べる「保守派」か「改革派」かによって見解が異なる。一方の中央アジアの改宗者は、ソビエト政権下では公然と宗教を信仰することができなかったこともあり、彼らの先祖がソビエト政権以前にどのような宗教を信じていたか最近まで知らなかったと主張するなどしている。彼らにとってゾロアスター教への入信は、彼ら本来の宗教、つまりソビエト政権下にあったために途絶えていた先祖の宗教に、情勢の変化から晴れて公に信仰を許され、戻って来たという意味合いがあるのである [Rahnamoon 2003: 2]。このため彼ら改宗者にとってナオジョテ（ゾロアスター教の入信儀礼）を受けることは、ゾロアスター教への入信を意味している。しかしパールシーの「保守派」は、パールシーとイラニー以外の人々のナオジョテは改宗儀礼だと主張しており、パールシーが呼ぶところの「改宗ゾロアスター教徒」を同じゾロアスター教徒とは認めていない。

その他に祖先などにゾロアスター教徒はいないが、イラン系と同じく改宗したり、あるいはそのような改宗者と共に行動したりするグループがある。彼らはアメリカや中南米、ソビエト政権崩壊後のロシアなどに多くいる⁸⁾。このような状況にあっては、ゾロアスター教徒とはいっても様々な人々いることが分かる。パールシーもイラン系ゾロアスター教徒も、これまで布教活動をしたことはなく、従来のゾロアスター教徒と改宗ゾロアスター教徒らの関係は希薄で、お互いにお互いをよく知らない。今後さらにゾロアスター教が広まり改宗者が増加すれば、従来述べられてきたゾロアスター教徒であるパールシーとイラン系ゾロアスター教徒が、少数者になる可能性もある。

このような状況に従来のゾロアスター教徒、特にパールシーの多くが漠然とした不安を抱いてい

る。彼らは現在、改宗者の存在に対し、「保守派 (Orthodox)」と「改革派 (Reformist)」の二つのグループに分かれ、激しい言い争いを起こしている⁹⁾。彼らの言う「保守派」とはゾロアスター教への改宗を認めず、かつ外婚をした女性に対して、いっさいのゾロアスター教徒としての権利を認めていない人々である。一方の「改革派」は、外婚女性の宗教的権利を擁護する人々と、改宗者と同じゾロアスター教徒として認めることを主張する人々からなる。しかし「保守派」は彼ら「改革派」の主張をゾロアスター教に反する考えだとし、批判している。パールシーの中には世代間の違いや、居住地域による違い、コミュニティ内における経済的格差、男女間の違いなど様々な違いが見られるだけでなく、改宗者に対する反応の違いによっても、彼らはこの「保守派」と「改革派」に分けられるのである。

むしろ改宗を巡る問題に関して、沈黙している人々も少なくない。しかしパールシーにとって改宗問題は、外婚や人口減少問題さらにはパールシーの定義やゾロアスター教徒のアイデンティティの問題とも絡んでおり、誰もが関わらざるを得ない身近な問題である。加えてコミュニティ内の人間関係を築く上で、宗教に対してどのような考えを持っているかが、彼らの重要な判断材料の一つとなっているのである¹⁰⁾。それゆえ自分や相手がコミュニティ内での位置づけにおいて、「保守派」なのか「改革派」なのかといった問題は、現在のパールシーにとって曖昧にはしておけない重要な問題なのである。

パールシーの中でもとりわけ聖職者は「保守派」が多数を占める。現在のところ「改革派」と称されている聖職者は二人だけである。彼ら二人は自ら改宗容認と外婚女性の宗教的権利擁護を表明し、実際、彼らに対するゾロアスター教の儀礼を行っている [Mama 2005: 20–23]。このため二人はパールシー高位聖職者から、再三にわたり警告を受けており、パールシー専用の葬儀場と一部の寺院から閉め出されている [Gandhi 2010b: 18–20, 27]。しかし「保守派」が主張する改宗と外婚に対する考えが、ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』の記述に基づいているかといったら、必ずしもそうとはいいきれない。では彼ら「保守派」は、なにをもって自らの立場を正当化するのか、そのためには「保守派」と「改革派」の対立構造の背景から見て行く必要がある。本論文はその問題点を考察するものである。

なおイラン系ゾロアスター教徒自身は、改宗ゾロアスター教徒に対して比較的好意的であり、保守的なパールシーのように改宗を全面的に否定しているわけではない。しかし彼らの歴史や社会的背景がパールシーのそれとはまったく異なり、またイラン系ゾロアスター教徒に関しての既存の調査・研究は十分でなく、ここで同様に論ずることは難しい。このためここではもっぱらパールシーに限って論ずることとする。

2. 現代パールシーの「伝統」

彼らのインド移住初期の歴史は今のところ、あまり分かっていない。それだけでなく移住してき

たゾロアスター教徒たちがどれくらいの規模だったのか、あるいは彼らの先祖はササン朝時代には何処に住み、何をしていたかといったことも不明である。このような状況において、1600年に聖職者バフマン・カイコバード・サンジャーナ (Bahuman Kaikobad Sanjana) によってペルシア語で書かれた『サンジャーナ物語 (Kisseh-i-Sanjan)』は、パールシーのインド移住初期について知ることができる数少ない資料の一つである。しかしこれは現在、研究者の間では彼らの移住という出来事を物語として語り継いで来たものを、まとめたものと考えられており、必ずしも史実を正確に記録したものとは考えられていない¹¹⁾。なお『サンジャーナ物語』はペルシア語で書かれており、グジャラート語や英語に訳されて広くパールシー一般に知られるようになったのは100年ほど前のことである [Williams 2009: 7]。そして彼らはこれを自分たちの歴史としている。

パールシーが自身の歴史を語る時は、この「サンジャーナ物語」とその後のイギリス統治時代におけるパールシーの目覚ましい活躍に終始している。彼ら自身が語るパールシーの歴史とは、「インドに移住し、ヨーロッパ勢がグジャラート地方にやってきた時、パールシーの勤勉正直が買われ、多くがヨーロッパ商館に雇われたことで、パールシーの経済的發展が始まった。そして早くからムンバイに移り住み、かつ教育熱心だったため、男性だけでなく女性も高い教育を受けていたことで、その後のムンバイの文化、社会、経済を牽引するまでになり、あらゆる分野の第一線でパールシーが活躍した。これによりパールシー・コミュニティは豊かになり、現在に到る」¹²⁾ というものがほとんどである。

インド移住を始めた10世紀頃から18世紀のパールシーの活躍までの間に関して、まったく分かっていないわけではない。例えば「サンジャーナ物語」は、神の導きによって偶然にもサンジャーナに上陸した、と語るが、最近の調査で当時、サンジャーナは栄えた港町で、パールシーもこれを知っており、経済的な動機から移住して来たのではないかとされている [Nanji and Dhalla 2007: 52-53]。この調査はパールシー研究者を中心にドラブ・ターター・トラスト (Dorab Tata Trust)¹³⁾ の支援のもと行われた [Nanji and Dhalla 2007: 55]。この調査結果は2007年に出版されているが、それによってパールシーの歴史観を変えるなどといったことは、今のところ見られない。このようなパールシー一般の無関心にかかわらず、1600年以降、19世紀までの時代こそが、パールシーの歴史にとって重要な時期なのである。この間にパールシー・コミュニティは様々な分裂を経験した。

この時代、ヨーロッパ勢がグジャラート地方にやってきたことで、パールシーの経済的發展の道が切り開かれた。それ以外にも次のようなことが起こった。まずムンバイをスーラトに代わる経済的拠点としようとしたイギリスの思惑により、多くのパールシーもムンバイへ移り [Kamerkar 1998: 133-134]¹⁴⁾、彼らの経済的拠点もスーラトからムンバイへ移って行った。これと並行してコミュニティ内の経済力の中心も、従来の聖職者から、新地ムンバイで商業的機會を得た平信徒へと、あるいは聖職者階級にありながら、聖職を放棄し、世俗化した聖職者らへと徐々に移行していった¹⁵⁾。加えてそれまでのパールシーの主だった職業は農工業だったが、それ以降は商業へと変わっていつ

た [Kulke 1994: 51–54]¹⁶⁾。このようにして世俗にあるものがムンバイで経済的な力を得たことで、聖職者の地位が低下していった¹⁷⁾。そして宗教的な拠点も、経済力のある教徒らによってナウサリからムンバイへ移されていった [Palsetia 2001: 75–76; Jeejeebhoy 1953: 319–320]¹⁸⁾。

またこの時代は同時に、コミュニティ分裂の時代でもあった。初めに1686年に、教区によって分けられたパールシーの聖職者の五つのグループの内、バガリア (Bhagaria、分かち合うの意) に属する聖職者と、サンジャーナ (Sanjana、拠点としていた地名に由来) に属する聖職者らの間で、宗教儀礼に関する仕事の分担を巡る争いが生じた [Kamerkar and Dhunjisha 2002: 61–84]¹⁹⁾。バガリアは彼ら聖職者の中で、最も大きく力のあるグループである。一方、サンジャーナは形の上では5つの聖職者グループの頂点にあった。両者の関係は修復されず、現在でもその対立の影響が残っており、パールシーの聖職者の統一を妨げている²⁰⁾。次の分裂が生じたのは1733年の聖職者と平信徒の争いである [Kamerkar and Dhunjisha 2002: 84]。この頃、パールシーの中では世俗にあるものが聖職者に代わって経済力を得て来た。そしてコミュニティ内において、それまでの聖職者と平信徒の関係に変化が生じた。この聖職者と平信徒の分裂は、この過渡期に起こった事件に関係している。聖職者らは彼らの娘たちが平信徒と結婚することで、聖職者の財産が平信徒へ移ることを嫌い、一方的に聖職者の娘と平信徒の息子の結婚を禁じた。これに対抗し、平信徒も彼らの娘と聖職者の息子の結婚を禁じたのである。現在このような禁止令は解消されているが、今でも80、90代以上の世代において聖職者階級のため結婚できず、生涯独身だったという女性の話を聞くことがある²¹⁾。

さらに1746年には、ゾロアスター教暦を巡ってコミュニティの分裂が生じた [Kamerkar and Dhunjisha 2002: 60–61]。その理由はゾロアスター教暦には閏年がないため、次第に季節と暦がずれていくからである。加えて移住期の困難な歴史の中で、その伝承に混乱が生じ、パールシーのゾロアスター教暦がイラン系ゾロアスター教徒のゾロアスター教暦より一ヵ月遅れている [Paymaster 1954: 77–78]。この差を正し、イラン系ゾロアスター教徒の暦に従うべきだと主張した一部のパールシーと、彼らに反発した大多数のパールシーの間に争いが生じ、当時のコミュニティが二分したのである。イラン系ゾロアスター教徒に従ったパールシーの一派を、カドミ (Kadmi、古典の意) と呼び、彼らに反発した一派をシャハンシャヒ (Shehanshahi、皇帝の意) と呼ぶ。当時は警察沙汰になるような衝突も生じ、寺院を別々に建立しなければならないほどであった。しかしそれでもまだ、彼らの暦は実際の季節とは大きくずれている。このため1906年にはカルシェートジー・カーマー (Khurshedji Cama)²²⁾ が、暦と季節を一致させようと、元旦を太陽暦の3月21日に固定し、閏年を採用したファスリ (Fasli、季節の意) 暦を創設した [Boyce 2001: 212–213]。ただしファスリ暦の登場は当時、争いを生むこともなく、それどころかあまり注目されなかった。こうして現在、ゾロアスター教徒の間には三つの暦が存在している。カドミとシャハンシャヒの間の争いは解消され、また季節に合ったファスリ暦が見直されつつあるといった状況にある。いまのところインドのパールシーの多くがシャハンシャヒ暦を、イランや欧米の教徒は主にファスリ暦を採用しており、分裂

の発端となったカドミ暦は風前の灯火となっている。

以上のように17世紀以降の聖職者同士や聖職者と平信徒そして暦を巡る分裂と争いは、一時的であり、それら自体が現代のパールシー・コミュニティに見られる分裂の直接の原因ではない。しかしそれはパールシー・コミュニティを大きく変え、それが現代のコミュニティにも間接的に影響を与えているのである。これら17世紀から19世紀におけるコミュニティ内の分裂とそれにとまなうコミュニティの変化がコミュニティにおける宗教的権威の弱体化を招き、その指導力を奪う結果になった。そして宗教的権威に代わって世俗の勢力を代表するパールシーの自治組織である、ボンベイ・パールシー・パンチャーヤット (Bombay Parsi Punchayet、以後 BPP) の発言権が増すことになった。しかし現在ではその BPP の内部にかえて「保守派」と「改革派」の対立が持ち込まれることになったのである。

一方で経済的にパールシーが絶頂期にあった19世紀中頃、彼らの間にも宗教改革が起こり、本来のゾロアスター教に戻ろうという運動が始まった [Boyce 2001: 199–202]。しかしこの時は未だ、コミュニティ内に宗教改革に対する抵抗という動きはさほど起こらなかった。なぜならヨーロッパで発展したゾロアスター教研究がインドに持ち込まれ、このことが聖職者の無知を暴くことになり、彼らの権威喪失を決定的なものにしたからである。すなわちコミュニティは全体として、宗教改革の必要性にせまられていたのである。この宗教改革において伝統的慣習の見直しが図られ、さらにヨーロッパにおけるゾロアスター教研究の影響下に、パールシーの宗教に対する意識が大きく変わった。それまで彼らにとっての信仰とは伝統慣習の実践を意味していたが、この宗教改革以後は、一つの思想として学ぶものになっていった。

そして宗教改革の一端として聖職者のための学校が設立され [Desai 1977: 69–70]²³⁾、そこでアヴェスタ語の文法やゾロアスター教の歴史を学びながら、必要な祈禱句や儀礼を習得していくようになった。また聖職者でなくとも、聖典を学ぶことができるようになった。そして誰でもヨーロッパのゾロアスター教研究に触れることが可能になっていった。このような宗教改革はパールシーの経済力が絶頂期にあり、宗教研究に対する財政的支援が可能だったために、実現したことでもある。つまりパールシーの宗教改革は、実際に世俗の勢力の牽引力に依ったのである。

度重なるコミュニティの分裂と、それによる宗教的権威の衰退、それから聖職者の自らの宗教に対する無知なことがヨーロッパにおけるゾロアスター教研究によって暴かれたことで、それまでの彼らが実践してきた慣習や歩んできた歴史といったものが形骸化した。代わりに19世紀のパールシーにとって尊重すべき伝統的慣習とは、ヨーロッパの文化的影響を受けながら、コミュニティ内の変化に合わせて彼らが新たに形成してきたものとなった。そして現代のパールシーは古い時代の彼らの歴史についてほとんど知らないため、現代の新たな価値観によって説明されたものを、彼らの昔からの「伝統」であると思っている²⁴⁾。これは現代の「保守派」であっても「改革派」であっても違いはないのである。

3. パールシーの経済的黄金期と慈善事業

パールシーの「保守派」と「改革派」の対立構造を考えると、もう一つ知っておかなければならないのが、パールシーの経済的黄金期についてである。なぜなら19世紀から20世紀におけるパールシーの経済的黄金期に対する記憶が、彼らのアイデンティティ形成に重要な役割を果たしているためである。この時代、ムンバイのヨーロッパ商館で、パールシーを雇っていない商館はなかったといわれるほど、多くのパールシーが仲介業で勢力を伸ばしていた [Rungha 1970: 57]。同時にムンバイの造船業も、やはりパールシーのワーディアー (Wadia) 家によって牛耳られていた [Kamerkar 1998: 134-135; Wadia 2004: xv]。多くのパールシーが仲介業で得た財とノウハウ、そしてワーディアー家との人脈で得た船で中国貿易にいち早く乗り出した。その代表がインド人で初めてイギリス女王から爵位を授与されたジャムシェトジー・ジージーバーイー (Jamsetjee Jejeebhoy, 1783-1859) である [Dadabhoy 2008: 4-12]。彼らはいわゆるアヘン貿易などで莫大な富を築いた。

その後、パールシーはその富を金融業につぎ込んだ。当時、銀行設立の際の重役や株主には、多くのパールシーの名が見られた [Rungha 1970: 23-24]。インド中央銀行 (Central Bank of India) は、パールシーであるソラブジー・ポチャカナワラ (Sorabji Pochkhanawala, 1881-1937) が中心となり、同じくパールシーのフィローズシャー・メータ (Pherozeshah Mehta, 1845-1915) が協力し、1911年に設立された [Central Bank of India 2004: 4-19]。中国貿易がパールシーの独壇場ではなくなると、次には紡績に進出した。その代表がジャムシェトジー・ターター (Jamshetji Tata) である。ジャムシェトジー・ターターも初めは中国貿易に従事していた [Dadabhoy 2008: 60]。これに続き、彼らは事業の多角化を行い、財閥を形成していった。現在も存続しているパールシー出自の財閥は、ターター・グループの他に中堅のワーディアー・グループ、建設業中心のシャープールジー・パロンジー、同じく建設業のルスラムジー、オフィス家具などのゴードレジーなどがある。

彼らパールシー経営者の特徴は、莫大な慈善事業を行っていることである。この大企業による大規模な慈善事業もまた、パールシーのアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている。インド社会一般に対する莫大な慈善事業を始めたのは、先に挙げたジャムシェトジー・ジージーバーイーである。彼は井戸を掘ったり、橋を架けたり、ムンバイのインフラ整備に力を入れただけでなく、初等、高等教育そして女子教育の普及や、医療衛生の整備、芸術・技術分野への貢献も果たした [Karanjia 1998: 40-57]。現在もムンバイにあるジャムシェトジー・ジージーバーイー病院 (Jamsetjee Jejeebhoy Hospital) は、彼の邸宅を改造して設立されたものである。ターターやゴードレジーなど他のパールシー出自の企業も、様々な慈善事業をしていることは、すでに知られている²⁵⁾。このような結果、20世紀初頭のある新聞でパールシーは「チャリティ、その名はパールシー (Charity, thy name is Parsi)」とまで呼ばれるようになり [Hinnells 2000: 211]、慈善事業による社会的貢献は、正直、勤勉と共に、パールシーの特徴の一つとされるようになった。このような経済的繁栄と社会的貢献は、現在のパールシーにとっても誇りであり、そのような人生こそパールシーの理想像と考

えられたのである。

コミュニティ内におけるパールシー自身を対象とした慈善事業も、彼らのアイデンティティ形成にとって重要な意味がある。まさしく揺りかごから墓場まで、パールシー・コミュニティの福利厚生施設は整備されており、これら全てをパールシー自身による寄付でまかなっている。ジャムシェトジー・ジーバーイーは、インド社会一般に寄付した額とはほぼ同額を、パールシー・コミュニティの慈善事業に寄付していた [Karanjia 1998: 79–81]。このようなコミュニティ内における慈善事業で最も重要なのは、20 世紀初頭から始まった住宅供給事業である。これは新たなアパートを建設するなど、現在でも続いている。例えばワーディア一家が提供したムンバイの土地に、BPP が住宅建設を計画し、パールシーの建設会社に発注するといった形である。建設費は寄付や、BPP が管理する住宅に入居している富裕層からの家賃収入などでまかなわれるなどしている²⁶⁾。

またパールシー・コミュニティの、少子高齢化の進行に対応するための慈善事業も顕著である。1930 年代には 51 才以上が 2 割近く、1955 年頃から、出生者数が死亡者数を下回るようになった [Kulke 1974: 42–43]。このような現状に対し、BPP は高齢者の生活支援や第三子のある家庭への育児支援金 [Master 2003: 6]、職業訓練、就職斡旋、結婚相談、医療支援などを行っている。さらに宗教施設、つまり拝火寺院と鳥葬施設の維持、宗教行事支援、起業支援、青少年育成プログラム主催、奨学金運営などといったものもある [BPP Review 2009: back cover]。他にもパールシーが経営する私立学校には、パールシーであれば無料で通える枠を設けているところもある²⁷⁾。こういった学校は英語教育など、将来に有利な質の良い教育を提供しており、裕福でなくとも、高い教育を受けることができるようになってきている²⁸⁾。葬式のための基金もある。このように人生で必要なもの殆どすべてが、BPP などによって支援されているのである。

BPP では大小 1,000 近い慈善事業を常時管理している [Desai 1977: 129–132]。BPP の他には主にグジャラート州の貧しいパールシーの生活支援などを行っている世界ゾロアスター教徒組織 (World Zoroastrian Organization) や、聖職者学校を運営しているアトルナン・マンダル (Athrnán Mandal、聖職者協会の意) などがある。その他にも個人が設立した基金管理団体が無数に存在する。寺院などは、このような団体が管理していることがほとんどである。コミュニティ内の慈善事業は、パールシーにパールシーとしての自覚、コミュニティの成員としての自覚を育むものとして重要である。このような自覚を持ったパールシーが少なくなれば、将来、パールシーの有志と寄付によってのみ支えられているコミュニティの福利厚生や慈善事業を支えることはできなくなる。

パールシーの慈善事業は、亡くなった家族などのフラワシ (fravashi、一種の先祖霊) を称えるために行われることが多い²⁹⁾。このような宗教的な意味も手伝って、彼らにとって慈善行為は、宗教的徳を積む重要な義務でもある。そして慈善事業は、彼らの社会的評価を高め、パールシーのアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている。しかしこのために現在、パールシー・コミュニティ内における慈善事業は充実しすぎ、後述するように、かえって様々な問題をもたらしているのも事

実である。このような問題を解消しようと、パールシーは様々な対策を講じているが、そこにも「保守派」と「改革派」という対立構造が絡んで、個々の対策に対する賛否両論が生じてくる。

4. コミュニティが抱える様々な問題

恵まれた環境を容易に手に入れることのできるパールシーは、他にくらべて有利な人生を送ることも難しくない³⁰⁾。ムンバイの一等地に住み、質の高い教育を受け、奨学金を得て海外へ留学することも可能である。さらにコミュニティ内の人脈を活かし、起業支援を得ることもできるのである。結果、1960年頃より、より良い教育や就職の機会を求めて多くが北米やオセアニア、中東などへと移住していった[Hinnells 2005: 453, 554-557; Bhesania 2004: 70-71]。彼ら移住者の特徴は、高学歴、高収入だということである。モーガン・スタンレーの金融部門やマイクロソフト、オラクルなどに勤めたり、弁護士や医師、研究者も多く、名刺交換をすると博士号を持っている人も少なくない。

このように恵まれてはいるが、一方で問題も抱えている。豊かなパールシーにあっても一部の貧しい家庭が存在し、その子供たちに必要な教育が行き届いていない事実があることである。これはコミュニティ内の様々な生活支援団体等の横の連携が取れておらず、一家族でいくつもの支援団体から生活支援金を得られる反面、それでなんとか生活していたことから、家庭内に向上心というものが育たなかったことに関係する[Bulsara 1935: 331-345]。この問題は、1930年代の調査において指摘され、その後、コミュニティ内の慈善事業団体の連絡役的組織を立ち上げたことで解消されたかに見えた[Masani 2004: 127-132]。しかし2007年に再び行われた実態調査でも、いくつもの支援団体から支援金を得ている家庭における教育レベルの低さ、生活状況の劣悪さなどが明らかになって³¹⁾おり、かつての教訓が活かされていないことを露呈している。

また伝統的慣習の衰退も無視できない。ゾロアスター教の特徴ともいえる鳥葬システムも、現在、南アジア一帯における猛禽類の減少によって、存続が危ぶまれている[Patel 2006: 2-3]。BPPでは対策として、太陽光パネルや微生物パウダーを導入し、何とか対応しているが³²⁾、今後どうなるかは不明である。また鳥葬施設が今も使用できるのは、インドとパキスタンのみである。欧米などには拝火寺院すらないといった状況にある。こういった状況は、ゾロアスター教の伝統的慣習に触れることができない世代を生み出している。そして先に述べた権威ある聖職者の不在は、伝統的慣習をどう次世代に伝えていくか、といった問題に対しても、様々な意見を生み出すだけで、解決ができないことになる。それどころか激しい議論に発展することも珍しくないのである。

パールシーは世界に分散しているので、教徒間の交流の少ないのも問題である。インドではパールシーが固まって居住し、そのそばには必ず寺院があるといった環境が当たり前である。しかしアメリカなどでは、近くても車で高速を使って一時間のところに、ようやく他のゾロアスター教徒の一家がいるなどといった状況にある³³⁾。北米では寄付を募って新たな寺院を建築する計画もあるが[Bhaya and Vesuna 2009: 1-3]、今のところインド、イラン、パキスタン以外に聖別された寺院は

存在しない。さらに今後は初期に移住した人々の高齢化の問題が予測されている [Rustomji 1999: 56–57]。二世、三世においては、学歴はおおむね高いものの、彼ら自身、ゾロアスター教徒としての自覚、アイデンティティ形成において不安を抱えている³⁴⁾。こういった環境から、欧米のパールシーの間では、インドやイランの同胞を支援する一方で、彼ら自身の次世代を育てるための交流促進や奨学金などを設立して対応している³⁵⁾。さらにパールシーとイラン系ゾロアスター教徒が協力し、1987年に北米各地のゾロアスター教徒協会をまとめる、北米ゾロアスター教徒協会連合 (Federation of Zoroastrian Associations of North America、以後 FEZANA) なども設立されている。

世界的な教徒同士の交流促進のため 1960 年からは 4,5 年置きに世界ゾロアスター教徒大会 (World Zoroastrian Congress、以後 WZC) を、世界各地で開催している。この大会はパールシーとイラン系ゾロアスター教徒が参加し、大体 4 日間の交流イベントを楽しむというものである。第一回はテヘランで、それからムンバイやヒューストン、ロンドンで開催された。2009 年末にはドバイで第九回が開催された。これまでの最高は第七回のヒューストン大会で、2,000 人が一度に集まった³⁶⁾。

しかし第七回 WZC では、パールシーとイラン系ゾロアスター教徒の言語の違いによる不満が、第八回 WZC ではゾロアスター教徒の定義を巡って紛糾し、FEZANA の打ち出す世界統一組織案への不満が噴出した。そして第九回 WZC でも大会当日になって、再びパールシーとイラン系ゾロアスター教徒の言語による違いが問題となって混乱した。世界のゾロアスター教徒が集まり、交流することがこの大会の目的であるが、このような国際的な話し合いを重ねれば重ねるほど、世界のゾロアスター教徒はバラバラであることを益々露呈するだけという、本来の国際大会の目的とは相反した結果を招いているのが事実なのである。特にパールシーとイラン系ゾロアスター教徒間の関係は、大会を重ねるごとに両者、距離を置く結果となっている。参加者の多くはお祭り気分の楽しみに終始し、必ずしも真の目的を意識しているとは見受けられない。このために以前から問題となっている他宗教からの改宗者への対応に関しても、本来のゾロアスター教徒として統一の見解すら出せない状況にある。加えて大会に参加するようなゾロアスター教徒の多くは、その生活基盤は恵まれており、気の合わない相手と無理に団結してでも問題を解決しなければならないといったような、焦燥感に欠けていることも、彼らの団結を難しくしている一つの要因である。

パールシーがもっとも頭を悩ませているのが、人口減少の問題である。2001 年のインド国勢調査で、パールシーは 69,601 人だった [Bengalee 2007: 19]。1991 年の調査では増加の傾向を見せていただけに、この結果はパールシーに大きな衝撃を与えた。彼らはこれを海外移住、晩婚化、少子高齢化に加えて外婚の増加が原因と考えている [Mama 2004: 62; Patel 2004: 2]。そのためパールシーの適齢期同士の男女の出会いを目的とした、交流イベントなどを対策の一つとして実施している [Guzder 2010: 20–22]。また外婚増加の一原因として、全体的に男子の学歴が、女子のそれより低いといったことも挙げられている [Mama 2009: 28] ので、この対策として BPP は、本来、社会的後進性が認められる指定カースト、指定部族及びその他の後進階層に割り当てられる高等教育機関の留保制

度枠を、人口の少ないパールシーにも与えるよう政府に要求した [Mama 2008b: 23]。しかしパールシーのための枠を設けているカレッジは以前からあったが、活用されず、無駄になっていた。また全国統一試験であまり良い成績が取れなかった場合には、海外へ留学するといった学生も少なくない [Gandhi 2007: 28–30]。このような状況にも関わらず、BPP は留保制度枠を要求したわけである。このままでは必ずしもその制度が、パールシーにおいて有効活用されるとは限らないといえる。

彼らが人口減少の一原因として挙げる外婚の増加は、「保守派」と「改革派」がもっとも激しく対立する問題である。一般的に「保守派」でもパールシー男性による非ゾロアスター教徒との外婚は認めており、彼らがコミュニティ内に留まり、非ゾロアスター教徒の妻と共にパールシー専用住宅で生活することも可能である。この場合、非ゾロアスター教徒の女性にコミュニティ内の慈善事業を受けることは制限されている。ただしその子供はゾロアスター教に入信することも可能であり、またパールシーのための慈善事業の対象者でもある。一方、パールシー女性と非ゾロアスター教徒との外婚は、深刻な問題をはらんでいる。まずこのような外婚の場合、パールシー女性はパールシー・コミュニティに留まることができない。かつゾロアスター教徒としてゾロアスター教を信仰したり、その宗教施設を使ったりすることもできないとされている。当然その子供のゾロアスター教への入信は不可能とされており、上述のように殆どの聖職者がこのような入信式の執行を拒絶している。このようなわけで、パールシー女性の外婚は、直接パールシー人口の減少につながるのである。さらに「保守派」の人々は、海外では同じ教徒同士の交流が乏しく、どうしてもパールシーとしての自覚が薄れ、改革的になり外婚をしやすくなると考えている。このため外婚を防ごうと、パールシーとしての自覚を持たせるための宗教教室 [Editorial Team 2010b: 2]、交流イベント開催支援そして生活支援を [Mehta 2010: 3; Dotivala 2010: 10]、これまで以上に充実させようとしているが、未だ目立った効果をあげていない。このようにパールシー・コミュニティは様々な問題を抱えており、それを解決することは難しいというのが現状である。

5. 「保守派」対「改革派」の構図

手厚すぎる慈善事業による弊害が指摘され続けているにもかかわらず、なぜこれらを是正することができないのか。それは慈善事業の場が、「保守派 (orthodox)」と「改革派 (reformist)」のそれぞれの主張を宣伝する場となっているためである。BPP が設立された当時より、パールシー・コミュニティ内には経済的な格差があった。経済的に余裕のあるものが慈善事業に多額の私財をつぎ込むだけでなく、BPP にも影響力を持っていた。そしてそこでのコミュニティ内の決まり事に関しても、経済的に余裕のあるものに有利なように進められることに、その他の人々は常に不満を持っていた [Karak 1977: I, 240–241]。現在でも「改革派」と呼ばれる人々には、かつてコミュニティを牽引していた人々の子孫が少なくない。また昨今、欧米への留学、就職などをした人々にも「改革派」が目立つ。先に挙げた北米のゾロアスター教徒連盟 FEZANA の役員には、改革的なパールシー

が多い。一方、保守派は主にインドに留まっているパールシーや聖職者、欧米等の一部のパールシーなどで構成されている。そして両者は「いかなるものをゾロアスター教徒として認めるか」という根本問題について、それぞれ主張し合い、対立を深めている。

「改革派」の間では、ゾロアスター教徒が直面している種々の問題に対応するため、1990年代後半から、世界的なゾロアスター教徒統一組織を設立しようという案が話し合われるようになった[Rivetna 2004: 60]。この中心となったのがFEZANAの役員たちであった。そしてFEZANAは、パールシーやイラン系ゾロアスター教徒だけでなく、1980年代から知られるようになった改宗ゾロアスター教徒も世界統一組織に組み込む方向で、その案を考えていた。これが「保守派」にとっては、かつてBPPの理事たちだけで、つまり経済的に余裕のあるものだけでコミュニティ内の物事を決めてしまおうとしたのと同様なものとして映ったのである[Editor of Parsiana 2004: 42-43]。ゾロアスター教徒の本拠地としての自負を持つ「保守派」は聖職者を取り込み、「改革派」が組み込もうとしている改宗者は、ゾロアスター教徒として認められるものではないとして強く反対した。そして彼らは、パールシー同士あるいはパールシーとイラニーの間に生まれた子供と、ゾロアスター教徒の男性と非ゾロアスター教徒の女性の間に生まれた子供のみをゾロアスター教徒と認めるとした[Gandhi 2003b: 44]。

「保守派」がこのような強硬な姿勢に出たのには、近年のインターネットの普及で欧米や中央アジアのゾロアスター教徒を自称する人々が、パールシーに接触して来たという背景がある。このような改宗者とそのグループがパールシーと接触する動機には、ゾロアスター教の知識を得るだけでなく、パールシーの経済力にも預かろうという面が少なからずあった³⁷⁾。「保守派」はこのような改宗者を受け入れれば、パールシーとしてのアイデンティティは薄まり、またパールシーの財産も彼らに乗っ取られてしまうと主張した[Parakh 2005: 12, 51]。そして外婚をしたゾロアスター教徒の女性の子供の受入も、同様の理由で反対し、かつ今まで以上に内婚を奨励しはじめたのである。

「保守派」の反論に、「改革派」は「保守派」を人種差別主義などと呼んだり[Daroowalla 2003; Green 2008]、教徒の人口減少が深刻な問題になっているのに、そのような考えを主張するのは自殺行為だなどと批判したりした[Csillag 2007; Parsi Tari Arsi 2010]。また聖典『アヴェスター』を根拠に、聖職者の言う「保守派」の主張の正統性を否定した[Editor of Parsiana 2007b: 32, 2007c: 30]。そしてゾロアスターは宗教選択の自由を全人類に説いたとし、ゾロアスターの教えに従うものは誰でもゾロアスター教徒になれるとしている。特に欧米ではインドよりも一層、外婚が進んでおり、このような夫婦の子供たちの入信式も珍しくなくなっている。加えて欧米のコミュニティはパールシーだけでなく、改宗者に理解を示しているイラン系ゾロアスター教徒もいる。こういったインド国内よりも高い外婚率や、発言力や行動力のあるイラン系ゾロアスター教徒の影響もあって、欧米のパールシーは、改宗者を同じゾロアスター教徒として違和感なく受け入れる傾向があるのである。

このように世界統一組織案を巡る対立が、「保守派」対「改革派」という構図を明確にした。そして現在、両者は益々対立を深めている。「保守派」は彼らが認めるところのゾロアスター教徒同士の結婚促進、ゾロアスター教徒コミュニティのさらなる充実をうたって、2005年にWorld Alliance of Parsi and Irani Zarthoshtis（以後 WAPIZ）³⁸⁾ や、Parsi Resource Group（以後 PRG）を相次いで設立した³⁹⁾。彼らは独自の聖職者支援プログラムや奨学金制度などだけでなく、交流プログラムなども行って、人々の注目を集めた。彼らはまたそれまでの慈善事業団体と異なり、インターネットにホームページを立ち上げて自身の活動を宣伝している。WAPIZ はさらに、インターネットに接続できない高齢者などにも支持層を広げるため、一般紙の広告という形で WAPIZ page を月二回、発行している。特に WAPIZ は彼らの慈善事業を宣伝するだけでなく、「改革派」の考え方、行動などの批判記事を頻繁に載せ、「改革派」に従っていたらパールシーそしてパールシー・コミュニティは存続できなくなるといったような読者の不安を煽っている。

「保守派」のこのような宣伝活動の狙いとなったのは、2008年10月に行われたBPP理事総選挙であった。それまでBPP理事選挙はBPPへの寄付者と大学卒以上の登録者に限られていた[Bamanbehram 1980: 1-2]。これは2007年4月に改正され[Editor of Parsiana 2007a: 19, 23]、パールシーであれば誰でも有権者登録が可能となった。この選挙では「保守派」、「改革派」それぞれが候補を擁立し、両者対立の構図をコミュニティ内外に示したものとなった⁴⁰⁾。選挙の結果は当選者7名中6名が、「保守派」の候補者によって占められた[Editor of Parsiana 2008: 36]。2009年4月には新しい理事の内、一人が逝去したため欠員選挙が行われたが、これもやはり「保守派」の候補者が当選した[Editor of Parsiana 2009: 14-17]。続く9月に行われたインド・パールシー・ゾロアスター教徒協会連合(Federation of the Parsi Zoroastrian Anjumans of India、ムンバイ以外のインドのパールシー・イラニー協会統一組織)の評議会委員選挙でも、「保守派」が優勢となった[Gandhi 2009: 20-22, 39]。このような結果はコミュニティ内に、「保守派」の代弁者となったWAPIZの要望を、BPPが叶えるといった傾向を生み出した。

「保守派」はこのような傾向に勢いを得て、さらに強硬な手段に訴えるようになっていった。まずは上述したように、改宗ゾロアスター教徒らに協力する二人のパールシー聖職者を、BPPが管理する宗教施設から追放した[Gandhi 2010: 18-20, 27]。次にこの二人の聖職者とパールシー女性の協力で、ロシア人改宗ゾロアスター教徒の聖職者になるための儀礼が行われようとしていたが、これを妨害した[Editor of Parsiana 2010: 18-19]。続いてゾロアスター教徒としての権利を主張し、裁判を起こした外婚をしたパールシー女性を批判した[Editorial Team 2010a: 1]。また別の外婚女性がその子供たちのゾロアスター教入信儀礼をしようとした際には、妨害をほのめかす行為を示した[Editor of Parsiana 2010b: 16-23]。さらにイギリスのWZOがそのメンバー資格を「ゾロアスター教を信仰する誰でも」入会可能であるとしたことに反発し、インドのWZOは、イギリスのWZOに従わないことを決定した[Editor of Parsiana 2010c: 16-18]。その上、外婚をまったく認めず、両

親ともにパールシー・カイルン系ゾロアスター教徒である子供のみ、ゾロアスター教への入信を認めようという署名活動を行っているグループもある [Gandhi 2010b: 18–20, 27]⁴¹⁾。

一方の「改革派」は初め、「保守派」のこのような過剰な反応を冷ややかに見ていた。あるいは2006年にFEZANAの役員が、彼らが構想した世界統一組織案を断念し⁴²⁾、「保守派」との妥協点を探るなど、「保守派」との対話路線を取っていた。しかしさらにエスカレートする「保守派」の反応や、インドのパールシー・コミュニティの保守化傾向を受け、「改革派」も次第に団結した行動に出始めた。まずBPPが二人の聖職者を追放した件に関して、これを不当とし、裁判所に訴えることとした [Editor of Parsiana 2010d: 28, 31]。このためにインターネット上で署名活動を行っていた⁴³⁾。さらにWZOのメンバー定義の拡大に「保守派」が反対したことに対して、本部であるイギリスのWZOはインドのWZOとは決別することを表明している [Editor of Parsiana 2010c: 16–18]。さらに北米の聖職者組織を長年率いて来たパールシー聖職者も、インドとは距離を置くことを表明している [Gandhi 2010a: 17–18]。そして「保守派」の新たな聖職者支援事業に対抗するためか、「改革派」も大規模な聖職者に対する慈善事業資金を提示している [Patel 2010: 2]。さらに1960年代から発行し続けているパールシーのコミュニティ誌パールシアナ (Parsiana) が昨今、「改革派」寄りの論調を強めていることにも注意すべきである。

6. おわりに

「保守派」も「改革派」も、先祖伝来のゾロアスター教を存続させたいがために、それぞれが正しいと思っていることを主張しているものであり、自らが正統であると信じている。そのために双方が聖典の同じ箇所を引用するにしても、その解釈は正反対であり、各々が自身の主張の正当性を裏付け、相手の主張を根拠のないものとして批判し合っているというのが現状である⁴⁴⁾。このような教義を巡る対立の要因として、まず宗教的権威の不在が挙げられる。いくら聖職者が「改革派」の案や改宗者の存在を否定しても、その効力は「保守派」内に限られ、彼らの権威を認めない「改革派」や改宗ゾロアスター教徒たちには無効である。その上パールシーも改宗ゾロアスター教徒も、ゾロアスター教に関する知識は同じ欧米におけるゾロアスター教研究にもとづいている。このことが「改革派」に改宗ゾロアスター教徒との違和感を感じさせない原因の一つとなっている。

さらに「保守派」はインド移住後、周囲のマジョリティ社会の影響を様々に受けて変化してきた慣習の中で、彼らの主張にあった部分だけを抜き取り、かつそれがあたかもインド移住以前から続く正統なゾロアスター教であるかのように主張している [Editorial Team 2010c: 1]。しかしこのようなアナクロニズムは歴史的根拠に欠け、いくら「保守派」が自らの主張をしたところで、相手には通じないばかりか、かえって「改革派」に少なからず存在する、欧米の研究に通じる人々からは失笑を買うだけとなる。また『アヴェスター』には未だ解釈の不明な箇所も多く、かつパールシーの歴史をそれほど研究していない段階でこれらを利用しているとなれば、新たな事実が出てきた際、

「保守派」の足下を崩すような事態になりかねない。『アヴェスター』において改宗を否定する個所がないこと、パールシーの歴史上、若干の改宗者を受け入れた事実があることなどから [Dhabhar 1999: 275–276]、「保守派」の主張は「改革派」によって、ことごとく事実とそぐわないと批判されているのである。

「保守派」対「改革派」のコミュニティ内の対立構造は、これまでパールシー自身がゾロアスター教徒として、彼ら自身の歴史と宗教を十分に研究してこなかった結果である。加えて欧米のゾロアスター教研究は、ササン朝までを中心としており、インド移住後のパールシーのゾロアスター教の研究は僅かである。つまり欧米の研究だけではパールシーの歴史が抜け落ち、彼らのアイデンティティを形成するところの、パールシーの宗教の独自性を知ることにはならないのである。このような現状においてはゾロアスター教という宗教だけをもってパールシーであることの意義や、パールシー・コミュニティを存続させる理由を見いだすのは困難となる。それゆえ宗教以外の彼らの経済力をもととする、世俗の慈善事業に力を入れるわけである。

「保守派」であれ「改革派」であれ、現代のパールシーのアイデンティティを形成しているものは、イギリスによるインド統治の時代における、彼らの輝かしい活躍に依拠している。しかし一方で彼らは「ゾロアスター教徒としてのアイデンティティ」も模索している。だがパールシー自身、パールシーのアイデンティティと「ゾロアスター教徒」としてのアイデンティティを混乱して考えており、このことがコミュニティ内に様々な問題を引き起こし、そこから「保守派」対「改革派」という対立構造も生じる。

パールシーはインド移住後、長い時間をかけて徐々に彼ら独自のゾロアスター教を形成していったのである。しかし欧米のゾロアスター教研究が持ち込まれ、その過程は中断し、彼らのアイデンティティに混乱が生じることとなった。それが今になって「保守派」対「改革派」といった対立構造となって表に出てきたといえるのである。

註

- 1) Mary Boyce, 1920–2006. 近・現代ゾロアスター教研究の先駆者。
- 2) イランからはインドへ移住してくるゾロアスター教徒だけでなく、パールシーとイラン系ゾロアスター教徒の間で、宗教的な質問をしたためた「リヴァーヤット (Riveyat)」と呼ばれる書簡が、14世紀から18世紀までの間に約30回行われた。パールシーが使者に質問状を託し、イラン系ゾロアスター教徒が同じ書状に返答を書き入れて、同じ使者に持ち帰らせるなどした。
- 3) ただし彼らの間で、イラン系ゾロアスター教徒をパールシーがいつ頃からイラニーと呼んでいるかは諸説ある。上述した以外にも、200年か300年前からという教徒もいる。ムンバイ聞き取り調査（1999年9月実施、対象者：20代パールシー女性、2009年12月実施、対象者：60代パールシー女性）より。
- 4) James Moulton, 1863–1917. イギリスの近代ゾロアスター教研究者。
- 5) John Hinnells, 1941–. ボイスに続く近・現代ゾロアスター教研究者。

- 6) Bozorg Bazgasht Organization (<http://www.bozorgbazgasht.com/index.html>) に、他宗教からゾロアスター教へ改宗する様子が紹介されている。Bozorg Bazgasht は great return の意。世界各地に出向いて、希望者にゾロアスター教への改宗儀礼を行っている。
- 7) fravahr.org (<http://www.fravahr.org/>) に、タジキスタン等でパールシー聖職者によって行われた、中央アジアの人々の改宗の様子が紹介されている。例えば [Master-Moos 2006] 参照。
- 8) 中南米の改宗者については [Pereira 2007]、あるいは [Devasia 2005]、ロシアの改宗者については Russian Anjoman (<http://www.blagoverie.org/eng/>) 参照。
- 9) 伝統厳守を主張する「保守派」は自らを Orthodox と呼び、「改革派」の人々も彼らを Orthodox と呼んでいる。一方「保守派」は進歩的な人々を Reformist あるいは Liberal Reformist などと呼んでいる。これに応じて新聞やコミュニティ誌では、この対立するパールシーの二大グループを Orthodox、Reformist と呼んで区別している。Orthodox とは自称であり、Reformist は他称である。両者はそれぞれ自らの正統性を主張している。故にここで Orthodox を正統派と訳すと、彼らの対立構造について誤解が生じる。このためここでは Orthodox を、「改革派」に対する伝統厳守の人々、つまり「保守派」と訳すことが適当である。
- 10) 「超保守派 (ultra orthodox)」と呼ばれる人々ほど、人間関係において相手の宗教に対する態度を重視する。これにはゾロアスター教特有の浄不浄観念も関係している。サンジャーノ宗教行事調査 (2003 年 11 月実施) などより。
- 11) ゾロアスター教に関して独自に研究をしているパールシー聖職者に面会した際、『サンジャーノ物語』に関して、これは物語で真実ではないので、購入しないようにと強く進められた。この聖職者は学識ある人物として、コミュニティ内で知られている。彼の母親も 1960 年代から独力で入信式前および初等教育レベルの子供たちを対象とした、ゾロアスター教のお祈りや基本的な教義を教える宗教教室を始めた女性として尊敬を集めている。ムンバイ聞き取り調査 (2000 年 4 月実施、対象者：中年パールシー聖職者) 及び、ムンバイ宗教教育調査 (2003 年 7 月～9 月実施、宗教教室見学) より。
- 12) 例えば 1997 年にカラチのパールシーによって出版された Parsis: Ancient and Modern and their Religion では、ササン朝の次に 10 世紀から 18 世紀における若干の旅行者のパールシー目撃証言について述べた後、ダダボイ・ナオロジーについて述べている。あるいは 2009 年 12 月末に開催された World Zoroastrian Congress では、イラン系ゾロアスター教徒の参加もあるにもかかわらず、ササン朝滅亡後、インドへ移住し、ムンバイで成功したといったイメージビデオを上映した。9th World Zoroastrian Congress in Dubai 参加調査 (2009 年 12 月 26 日～31 日) より。なおパールシー名の日本語表記は、これまでの先攻研究においてすでになされているものは、それに則り、その他についてはできるだけ聞き取った発音に近い読み方で表記することとする。
- 13) 1932 年設立。Tata Sons の所有する慈善団体の一つ。
- 14) 1640 年にスーラトからムンバイに移住して来た最初のパールシーは、ポルトガルのプロカーで後にイギリスの徴税役だったドラブジー・ナナバイ・パテル (Dorabji Nanabhai Patel: ?-1689) だといわれている。なおムンバイの呼称については、当研究ノートにおいて、ムンバイがボンベイと呼ばれる以前から再びムンバイと呼ばれるようになった現代まで扱っていることを考慮し、統一してムンバイとすることとする。
- 15) その代表的な人物が、現在の Tata Group を創設した Jamsetji Tata (1839-1904) である。
- 16) 1864 年にイギリスによって行われたインド国勢調査によれば、農工業に従事するパールシーは、全体の 2.1% であった。当時の彼らの主な職業は、プロカーや金融業、事務職、小売業などであった。
- 17) ゾロアスター教の拝火寺院の多くが、経済的に成功したパールシーの寄付によって建立され、その一族によって管理されている。聖職者の雇用に関しても寺院を管理する一族や、一族の基金団体などが行っている。このため現在でも、高位聖職者と呼ばれる人であっても、寺院を管理する一族の意向を無視することはできないと言われている。

- 18) 1791年には儀礼に欠かせない白牛をムンバイで独自で飼育しだした。1823年には当時の経済的有力者らが理事を務めていたパールシーの自治組織ボンベイ・パールシー・パンチャーヤット (Bombay Parsi Punchayet) が、高位聖職者の格付けを独自で行い、バガリアに属し、ムンバイの第一高位聖職者であったジャーマスバサナ (Jamaspasana) を第一位に、同じくバガリアに属し、現在でもバガリアの頂点にあるメヘルジ・ラーナ (Meherji Rana) を第四位に位置づけた。つまり世俗の組織が、聖職者グループの一つであるバガリア内における、本来の位置関係を逆転させたのである。なおムンバイはバガリア教区。
- 19) 当時、バガリアとサンジャーナはナウサリで共存していた。なぜならサンジャーナの本拠地であるサンジャーナがムスリムの侵略にあい、この地のパールシーたちは最終的にナウサリに逃れたためである。この際、バガリアとサンジャーナが共存するために、サンジャーナの事は彼らが管理していた聖火の世話だけとし、その他の年中行事等はバガリアが担うこととすると取り決めた。しかし次第にサンジャーナがバガリアの権利を侵害するようなことが頻発し、両者の対立へと発展した。
- 20) 現在サンジャーナはグジャラート州ウドワダを拠点としている。ウドワダではサンジャーナによる儀礼執行だけが許されており、今でもバガリアその他の聖職者グループは、個人宅であってもウドワダ内での儀礼執行は禁じられている。この取り決めの発端は1686年のサンジャーナとバガリアの分裂にある。ウドワダ聞き取り調査 (2007年12月実施、対象者：高位聖職者の女性家族) より。
- 21) ナウサリ聞き取り調査 (1999年9月実施、対象者：聖職者階級の女性ら) より。
- 22) Khurshedji Cama, 1831-1909. 貿易商人でありながら、ヨーロッパのゾロアスター教研究者との交流もあった。後に、そこで得た当時最新のゾロアスター教研究をインドに持ち帰り、パールシーにその知識を普及することに尽力した。
- 23) 1854年には Mulla Feroze Madressa が Khurshedji Cama の尽力で設立された。ここでゾロアスター教の慣習等に関して様々な研究書を残した Jivanji Modi も学んだ。1863年には聖職者の子弟の語学習得のための Sir Jamsetjee Jejeebhoy Zarthoshti Madressa が Sir Jamsetjee Jejeebhoy の死を悼んで、彼の遺族によって設立された。
- 24) 例えばゾロアスター教の特徴の一つである鳥葬を、パールシーは衛生的で経済的である、もっとも優れた葬法と説明し、それ以上の宗教的な意味を知らない。この説明は、本来は19世紀のパールシーが西洋人の価値観に合わせて採用したものである。しかしそれがパールシーの間にも定着し、現在に至っているのである。ムンバイ聞き取り調査 (2007年12月実施、対象者：パールシー 80代男性、80代女性、60代女性) などより。
- 25) ターター・グループの慈善事業に関しては Tata Group Homepage, Our Commitment (<http://www.tata.com/ourcommitment/index.aspx?sectid=ei6stgDjpgA>) を参照、ゴードレジ・グループの慈善事業に関しては、Godrej Homepage, Pass it Forward (<http://www.godrej.com/godrej/godrej/passitforward.aspx?id=1&menuid=1163>) を参照。
- 26) ムンバイ聞き取り調査 (2009年12月実施、対象者：ボンベイ・パールシー・パンチャーヤットの事務局長) より。
- 27) 例えば Sir Jamsetjee Jejeebhoy Parsee Benevolent Institute など。
- 28) 英語教育は幼稚園から始まっている。ムンバイ聞き取り調査 (2007年12月実施、対象者：二児の母親の30代パールシー女性) より。
- 29) 例えばムンバイの拝火寺院 Seth Jamshedji Jejeebhoy Godavara Agiary は、ジャムシェトジーを偲んで、息子たちが1826年に建立。ニューデリーの保養施設 Kaikhushru Pallonji Katrak Daremecher は、夫カイコシュエロウの生前を偲んで、彼の死後のフラワシを称えるために、妻が寺院建立のための基金を設立。その後、数名からの寄付を得て、1961年に建設された。
- 30) パールシー・コミュニティには様々な慈善事業がある。例えば孤児であってもパールシーのための孤児院がある。学費が払えなくても、パールシーであれば無償で通える学校もある。そこには寮も用意され

ている。さらに現在 BPP では、全パールシーがパールシー専用住宅に住めるよう、計画を進めている最中である。パールシー専用の病院や、奨学金、就職斡旋、生活支援なども様々ある。このため収入が貧困層レベルであっても、路上生活者はいないという調査結果も出ている。

- 31) [Parsi Tari Arsi 2010b, 2010c] に調査内容がまとめられている。
- 32) ムンバイ聞き取り調査（2005 年 4 月実施、対象者：鳥葬施設管理責任者）より。
- 33) アメリカ、オースティン調査（2000 年 12 月実施）、及びシアトル調査（2004 年 8 月実施）より。
- 34) 多くが友人の中でゾロアスター教徒は自分だけであり、他と違うことを意識している。またはゾロアスター教徒の証であるストラと呼ばれるシャツと、クスティと呼ばれる腰紐を友人に見られ、からかわれた、あるいはからかわれるのではとった不安を抱いた経験がある人々も少なくない。オースティン、ヒューストン（2000 年 12 月実施、対象者：香港出身の 10 代パールシー女性他）、及びシアトルでの聞き取り調査（2004 年 8 月実施、対象者：シアトル居住の 10 代パールシー女性）より。
- 35) 例えば Federation of Zoroastrian Associations of North America では、高等教育やスポーツなどのための 8 つの奨学金を運営。2009 年度は一人に対して、最高で 5,000 ドルが支払われた。またボストンやオースティン（テキサス）などでは、ゾロアスター教徒の学生自ら学生組織を設立し、積極的にゾロアスター教を学ぶ教徒も多い。1987 年からは 1、2 年に一度のペースで、North American Zoroastrian Youth Congress も開催されている。詳しくは FEZANA HP (<http://www.fezana.org/>) 参照。
- 36) 第七回（ヒューストン、2000 年 12 月）、第八回（ロンドン、2005 年 7 月）、第九回（ドバイ、2009 年 12 月）世界大会参加調査より。
- 37) [Master-Moos 2007]。これは改宗を希望する人々や改宗ゾロアスター教徒と交流のある人々に好意的なサイトである。記事を書いた Master-Moos は、特に改宗ゾロアスター教徒を支援する人物としてコミュニティ内で知らないものはいない。
- 38) WAPIZ の活動は WAPIZ page 他、WAPIZ のホームページでも知ることができる。WAPIZ home page(<http://www.wapiz.com/>)。
- 39) PRG は会報などを発行していない。その活動は PRG のホームページで知ることができる。PRG home page (<http://www.parsiresourcegroup.org/>)。
- 40) [Pawar 2008]、"Parsi Punchayat Gears Up for Polls," *Times of India*, August 10, 2008. (<http://timesofindia.indiatimes.com/articleshow/3347568.cms?prtpage=1>, 2011 年 2 月 17 日アクセス)。
- 41) この活動に関しては Supporters of Traditional Zoroastrianism (<http://www.PetitionOnline.com/TradZ/petition.html>) で見ることができる。
- 42) FEZANA は世界ゾロアスター教徒統一組織設立計画を一時中断することを、2006 年に文書で発表している。詳しくは FEZANA HP (<http://www.fezana.org/>) World Body Report at 2006 FEZANA AGM 参照。
- 43) 彼らの署名活動は Against Parsi Conservatism (<http://www.PetitionOnline.com/pingping/petition.html>) で見ることができる。
- 44) 『アヴェスター』のヤスナ書 30 章 2 節を引用し、この内の「選択決定に関する二種信条」に関して「改革派」はこれを異なる二つの宗教を選択することと解釈し、一方「保守派」は善悪という道徳の選択について述べていると解釈している。なおヤスナ書 30 章 2 節の訳は、[伊藤 1967: 330] を参照した。

参考文献

青木健、2008、『ゾロアスター教』、講談社選書メチエ 408、講談社。

足利惇氏、1972、『ペルシア宗教思想』、国書刊行会。

- 、1988a、「印度パルシー族とその習俗」、岩本・小林・渡瀬（編）『足利惇氏著作集』、第二卷インド学、東海大学出版会、219-265 頁。
- 、1988b、「波斯『エズド』に於ける拝火教の現況」、伊藤・井本（編）『足利惇氏著作集』、第一卷イラン学、東海大学出版会、44-59 頁。
- 伊藤義教、1967、「アヴェスター」、辻直四郎（編）、『ヴェーダ・アヴェスター』、世界古典文学全集 3、筑摩書房、325-395 頁。
- 、1996、『ゾロアスター研究』、岩波書店。
- 、2001、『ゾロアスター教論集』、平川出版社。
- 岩本裕、1959、『インド史』、修道社。
- 岡田明憲、1982、『ゾロアスター教—神々への讃歌』、平川出版社。
- 、1984、『ゾロアスター教の悪魔払い』、平川出版社。
- 、1985、「パルシーと神智学—ゾロアスター教近代化の一側面」、『オリент』、第 28 巻第 2 号、66-77 頁。
- 、1992、「ゾロアスター教の鳥葬」、『古代オリент』、第 25 巻、NHK 学園、7-10 頁。
- 、2004、「ゾロアスター教と神秘主義」『三笠宮殿下米寿記念論集』、刀水書房、152-164 頁。
- 蒲生禮一、1972、『イラン史』、世界歴史叢書、修道社。
- 黒柳恒男、1973、「パルシーの信仰と歴史」『アジア仏教史・インド編 V—インドの諸宗教』、佼成出版社、285-318 頁。
- 前田耕作、1997、『宗祖ゾロアスター』、筑摩書房。
- Amighi, Janet K., 1990, *The Zoroastrians of Iran: Conversion, Assimilation, or Persistence*, New York: AMS Press.
- Bamanbehram, Rashid, 1980, “BPP Electoral System: A Need for Change,” *Parsiana*, 3-2, pp. 1-3.
- Bengalee, Mehroo, 2007, *Research Project Report on All India Birth Rate of Parsi : Zoroastrians from 2001 till 15th August, 2007*, New Delhi: National Commission for Minorities.
- Bhaya, Dhun and Sam Vesuna, 2009, *Annual Report of the Building Project Committee*, July, Ontario: Zoroastrian Society of Ontario.
- Bhesania, Meher, 2004, “Diaspora in the Persian Gulf,” *FEZANA Journal*, 17-4, pp. 70-71.
- Boyce, Mary, 2001, *Zoroastrians: Their Religious Beliefs and Practices*, London and New York: Routledge and Kegan Paul Ltd. (山本由美子（訳）、2010、『ゾロアスター教—三五〇〇年の歴史』、講談社学術文庫、講談社。)
- Boyce, Mary, 1989, *A Persian Stronghold of Zoroastrianism: based on the Ratanbai Katrak Lectures, 1975*, Persian Studies Series, No. 12, Lanham, New York & London: University Press of America.
- Bulsara, Jal F., 1935, *Parsi Charity Relief and Communal Amelioration*, Mumbai: Sanj Vartaman

Press.

Central Bank of India, 2004, *Central Bank of India: Of the Indians. By the Indians. For the Indians.*, Mumbai: Central Bank of India.

Cooper, P. 1983, "The Navjote of Joseph Peterson", *Parsiana*, 5-10, pp. 2-7.

Dadabhoy, Bakhtiar K., 2008, *Sugar in Milk: Lives of Eminent Parsis*, New Delhi: Rupa & Corporation.

Dadachanji, F. K., 1997, *Parsis: Ancient and Modern and Their Religion*, Karachi: Privately-Printed.

Darowalla, Maneck, 2003, "A Closed Community and Z Religion," *Zoroastrians*, April 10, 2003.

Desai, Hormazdyar J. M., 2008, *History of the Parsis of Navsari*, Mumbai: World Zarathushti Cultural Foundation.

Desai, Sapur F., 1977, *History of the Bombay Parsi Punchayet 1860-1960*, Mumbai: Parsi Punchayet Funds and Properties.

Dhabhar, Bamanji N., 1999, *The Persian Rivayats of Hormazyar Framarz and Others: Their Version with Introduction and Notes*, Mumbai: The K. R. Cama Oriental Institute.

Dhalla, Maneckji N., 2000, *Zoroastrian Civilization: From the Earliest Times to the Downfall of the Last Zoroastrian Empire 651 A. D.*, Mumbai: The K.R. Cama Oriental Institute.

Dotivala, Godrej N., 2010, "Mix and Match the BPP Revives Its Matrimonial Programme with Exciting Activities," *BPP Review*, 1-7, p. 10.

Editor of Parsiana, 2004, "Don't Create a Monster: The High Priests and the Other Orthodox Sections Urge the Bombay Parsi Punchayet and the Indian Federation Not to Join the Proposed World Body," *Parsiana*, 27-4, pp. 41-44.

———, 2007a, "Adult Franchise at Last: Bombay High Court Justice A. M. Khanwilkar Sanctioned the Scheme of Adult Franchise for Electing Trustees to the Bombay Parsi Punchayet," *Parsiana*, 29-17, p. 19, 23.

———, 2007b, "A Tradition of Acceptance: Excerpts from Dina McIntyre's Talk where She Unleashed a Wealth of Evidence from the Gathas, the Daily Prayers, Tradition and Customs to Prove that Zarathushtra Preached a Universal Faith," *Parsiana*, 29-18, p. 32.

———, 2007c, "A Tradition of Acceptance – II: Continuing with Excerpts from Dina McIntyre's Speech on the Universality of the Zoroastrian Faith," *Parsiana*, 29-19, p. 30.

———, 2008, "The Final Hours: Heated Exchanges, Allegations, Suspense and Jubilation Marked the End of An Era for the Bombay Parsi Punchayet," *Parsiana*, 31-7, pp. 13-15, 36-39.

———, 2009, "Tirandaz Triumphs: Armaity Tirandas wins the Bombay Parsi Punchayet Trusteeship Election by a Margin of 648 Votes over Her Rival Maneck Engineer," *Parsiana*, 31-19, pp. 14-

- 17.
- , 2010a, “The Shame at Sanjan,” *Parsiana*, 32-15, pp. 18–19.
- , 2010b, “The Nightmare and the Navjotes: the Maloo-D’Souza Family Went through a Week of Agony to Perform Their Children’s Novjotes,” *Parsiana*, 32-19, pp. 16–23.
- , 2010c, “War of the Worlds: the World Zoroastrian Organisation Splits over the Issue of Who Qualifies for Membership,” *Parsiana*, 32-22, pp. 16–18.
- , 2010c, “Lending a Hand against the Ban: Five Eminent Community Members Have Legally Lodged Their Opposition against the Ban on Two Priests Promulgated by the Bombay Parsi Punchayet,” *Parsiana*, 32-23, p. 28, 31.
- Editorial Team, 2010a, “The Neha Mahipal Gupta Case,” *WAPIZ Page*, 7 May, 2010, p. 1.
- , 2010b, “The Aslaji Agiary Cleanup!,” *WAPIZ Page*, 9 July, 2010, p. 2.
- , 2010c, “It is This Same Foremost Living Scholar of the Zoroastrian Faith, Dastur Dr. Firoze Kotwal Who Has Dismissed the Idea of Conversion to the Zoroastrian Religion!: Read Below, Dasturji’s Learned Opinion on the Subject,” *WAPIZ Page*, 24 September, 2010, p. 1.
- Eduljee, H. E., 1996, *Kisseh-i Sanjan*, Mumbai: K. R. Cama Oriental Insititute.
- Engineer, Shernaaz, 2009, “Democratisation of the Federation,” *BPP Review*, 1-1, pp. 6–13.
- Gandhi, Parinaz M., 2003a, “To Safeguard the Survival...: The Recent Decision by the High Priests Debrign Priests from Performing the Ashirwad for Interfaith Marriages or Navjotes of Children of Intercommunity Marriages Has Created a Furore,” *Parsiana*, 25-9, pp. 21–25.
- , 2003b, “On Further Reflection...: Bowing to Public Outrage Three of the Six High Priests Rescinded Sections of Their Resolution Pertaining to Interfaith Marriages and Their Progeny,” *Parsiana*, 25-10, p. 22, 44.
- , 2007, “Concentrating on the Commission: With Her Appointment as Member of the National Commission for Minorities, Dr Mehroo Bengalee Will Give Due Priority to Education and Conservation,” *Parsiana*, 29-20, pp. 28–30.
- , 2009, “A New Beginning...: Around 50 Anjumans were Represented at the Meeting Convened by the Federation of Parsi Zoroastrian Anjumans of India under the Sway of the Orthodox Leadership,” *Parsiana*, 32-4, pp. 20–22, 39.
- , 2010a, “Religion with Responsibility: After Duly Studying and Understanding the Religion, Priests in North America are Fortified to Take Decisions, Independent of India, Says Ervad (Dr) Jehan Bagli,” *Parsiana*, 32-24, pp. 17–18.
- , 2010b, “The Petition Phenomenon: Rather than be Helpless Spectators, Camille and Zeenia Framroze Chose to Initiate a Campaign to Protest against the Ban on Two Priests,” *Parsiana*,

- 33-1, pp. 18–20, 27.
- Giara, Marzban J., 1999, *The Zoroastrian Pilgrim's Guid*, Mumbai: Jenaz Printers.
- Guzder, Hilla P., 2010, "Youthful Zing: The Zoroastrian Youth for the Next Generation (ZYNG) Organization of the Bombay Parsi Punchayet was Launched in December," *Parsiana*, 32-11, pp. 20–22.
- Haug, Martin, 1978, *The Parsis: Essays on Their Sacred Language, Writings and Religion*, Delhi: Cosmo Publications.
- Hinnells, John R., 2000, "The Flowering of Zoroastrian Benevolence," in John R. Hinnells (ed.) *Zoroastrian and Parsi Studies: Selected Works of John R. Hinnells*, Aldershot, Burlington USA, Singapore & Sydney: Ashgate, pp. 209–240.
- , 2005, *The Zoroastrian Diaspora: Religion and Migration*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Hodivala, Shahpurshah. H., 1920, *Studies in Parsi History*, Mumbai: The J. N. Petit Parsi Orphanage Captain Printing Works.
- Irani, Kaikhosrov and Farrokh Vajifdar, 1998, "Conversion in Zoroastrianism: The Truth Behind the Trumpery," *Humata*, 1-3, pp. 8–25.
- Jafarey, Ali A., 2007, "Welcom to All: With Her Navjote Performed at the Age of 44, Amy Jafarey Kept Ties with Members of All Faiths," *Parsiana*, 30-7, pp. 37–39.
- Jeejeebhoy, J., 1953, "Communal Discipline Among the Bombay Parsees," in Olden Times, *M. P. Khareghat Memorial Volume*, Mumbai, pp.295–323.
- Kamerkar, M., 1998, "Parsis In Maritime Trade on The Western Coast of India From The Seventeenth to The Nineteenth Century," in Nawaz Mody (ed.), *The Parsis In Western India: 1818 to 1920*, Mumbai: Allied Publishers Ltd., pp. 129–145.
- Kamerkar, M. and Dhunjisha, S., 2002, *From the Iranian Plateau to the Shores of Gujarat: The Story of Parsi Settlements and Absorption in India*, Mumbai: The K. R. Cama Oriental Institute.
- Kanga, Kavasji E., (Trans.), *Extracts from the Narrative of Mons. Anquetil Du Perron's Travels in India, Chiefly Those Concerning His Researches in the Life and Religion of Zoroaster, and in the Ceremonial and Ethical System of the Same Religion as Contained in Zend and Pehlvi Books*, Mumbai: Commercial Press.
- Karaka, Dosabhai F, 1977, *History of the Parsis*, Vols. 1 and 2, New York: AMS Press INC.
- Karkaria, Bachi, 2004, "Parsis: India's 'Molecularity': Census 2001: Down From 76,382 to 69,601," *Times of India*, Thursday, September 9, p. 11.
- Kulke, E, 1994, *The Parsees in India*, New Delhi: Vikas Publishing House Pvt. Ltd.

- Karanjia, B. K., 1998, *Give Me a Bombay Merchant – Anytime!: The Life of Sir Jamsetjee Jejeebhoy, Bt. 1783–1859*, Mumbai: University of Mumbai.
- Lala, Rusi, M., 1998, *The Heartbeat of a Trust: The Story of the Sir Dorabji Tata Trust*, New Delhi: Tata McGraw-Hill Publishing Company Limited.
- Mama, Arnavaz S., 2004, “‘Revival, Not Survival’: Despite the Gloomy Prognosis Presented by the Census Commissioner of India, the All India Federation Leaders Sought Ways to Counter the Dwindling Community Numbers,” *Parsiana*, 26-8, pp. 57–66, 114.
- , 2005, “The AZR Agenda: The Start of A Prayer Hall that Welcom Otmarrred Zoroastrians with Their Families is A Major Victory for the Liberals,” *Parsiana*, 28-3, pp. 20–23.
- , 2008a, “The Orthodox Denieal: Conversion/Acceptance is Alien to Zoroastrianism, Say Orthodox Spokesmen,” *Parsiana*, 30-15, pp. 17–20.
- , 2008b, “Mainstreaming Minorities: The Minorities Development Department of the Government of Maharashtra Hosts A Special Workshop,” *Parsiana*, 30-24, pp. 22–23.
- , 2009, “A Journey of Discovery: II,” *Parsiana*, 31-17, pp. 28–30.
- Masani, R. P., 2004, *N. M. Wadia and His Foundation*, Mumbai: Bombay Parsi Punchayet Funds and Properties.
- Master, Sheroo, 2003, “Third Child Guidelines,” *Parsiana*, 25-10, p. 6.
- Mirza, Hormazdyar K., 1987, *Outlines of Parsi History*, Mumbai: Melhi J. Batliboi of Amalgamated Enterprises.
- Mehta, Dinshaw, 2010, “Taking the Mandate Ahead,” *BPP Review*, 1-3, p. 3.
- Palsetia, J., 2001, *The Parsis of India Preservation of Identity in Bombay City*, Leiden, Boston & Koln: Brill.
- Modi, Homai, 1991, “History and Activities of The K. R. Cama Oriental Institute,” in *75years Platinum Jubilee Volume*, Mumbai: K. R. Cama Oriental Institute, pp. 3–10.
- Modi, Jivanji J., 1995, *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*, Mumbai: Society for the Promotion of Zoroastrian Religious Knowledge and Education.
- Mondegari, M., 2006, “Editor’s Note,” *Zoroastrian Journal*, 1-4, p. 3.
- Nanji, R. and H. Dhalla, 2007, “The Landing of the Zoroastrians at Sanjan: The Archaeological Evidence,” in J. Hinnells and A. Williams (eds.), *Parsis in India and the Diaspora*, London and New York: Routledge.
- Moulton, James H., 1917, *The Treasure of the Magi: A Study of Modern Zoroastrianism*, London: Oxford University Press.
- Parakh, T., 2005, *Some Crucial Points about the Proposed World Body*, Mumbai: Private Report.

- Parsi Tari Arsi, 2010a, "Banned Priest Case Becoming Celebre," *Bombay Samachar*, June 27, 2010.
- Patel, Jehangir R., 2004, "The Weaker Sex?," *Parsiana*, 26-7, p. 2, 11.
- , 2006, "The Specter of Doongerwadi," *Parsiana*, 28-21, pp. 2-3.
- , 2010, "The Gift of Giving," *Parsiana*, 32-24, pp. 2-3.
- Paymaster, R., 1954, *Early History of the Parsees in India: From Their Landing in Sanjan to 1700 A.D.*, Mumbai: Zartoshti Dharam Sambandhi Kelavni Apnari Ane Dnyan Felavnari Mandli.
- Phadke, Y. D., 1997, "Sir Pherozechah Mehta and the Indian National Congress," N. Mody (ed.), *Pherozechah Mehta: Maker of Modern India*, Mumbai: Allied Publishers Ltd., pp. 22-35.
- Rivetna, Rohinton, 2004, "Towards A Robust Infrastructure for Zarathushtis of the World," *FEZANA Journal*, 17-1, pp. 58-60.
- Rustomji, Aban and Purvez, 1999, "A Tribute to the Roshans of Our Community," *FEZANA Journal*, 12-4, pp. 56-57.
- Smith, Vincent A., 1917, *Akbar the Great Mogul 1542-1605*, Oxford: Clarendon Press.
- Rahnamoon, F., 2003, "Editorial," *Iran Zamin*, 4-4, pp. 1-4.
- Rungta, Radhe S., 1970, *The Rise of Business Corporations in India 1851-1900*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sharafi, Mitra J., 2006, *Bella's Case: Parsi Identity and the Law in Colonial Rangoon, Bombay and London, 1887-1925*, Michigan: UMI Dissertation Services.
- The Trustees of the Parsi Punchayet Funds and Properties, 1990, *Towers of Silence at Doongerwadi in Bombay: The Zoroastrian Mode of Disposal of the Dead*, Mumbai: The Trustees of the Parsi Punchayet Funds and Properties.
- The World Zoroastrian Organisation, 1991, *History of The World Zoroastrian Organisation*, London: the World Zoroastrian Organisation.
- Wadia, Ruttonjee A., 2004, *The Bombay Dockyard and the Wadia Master Builders*, Mumbai: Bombay Parsi Punchayet Funds and Properties.
- White, David I., 1995, *Competition and Collaboration: Parsi Merchants and the English East India Company in 18th Century India*, Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd.
- Williams, A., 2009, *The Zoroastrian Myth of Migration from Iran and Settlement in the Indian Diaspora: Text, Translation and Analysis of the 16th Century Qesse-ye Sanjan 'The Story of Sanjan'*, Leiden: BRILL.
- Zaehner, R. C., 2003, *The Dawn and Twilight of Zoroastrianism*, London and New York: Phoenix Press.

- Csillag, Ron, 2007, "Zoroastrians Debate How to Keep Faith Alive," *The Star*, June 30, 2007. (<http://www.thestar.com/living/article/229660>、2011年2月17日アクセス)
- Devasia, Sanjeev, 2005, "Parsis Upset over New Conversions," *Worldwide Religious News*, May 30, 2005. (<http://wwrn.org/articles/17070/?&place=india§ion=other>、2011年2月17日アクセス)
- Green, Tody, 2008, "Doomed by Faith," *The Independent on Sunday*, June 28, 2008. (<http://www.independent.co.uk/news/world/asia/doomed-by-faith-856095.html>、2011年2月17日アクセス)
- Master-Moos, Meher, 2006, "Aryan Revival in Tajikistan September 2006," *Fravahr.org*, December 11, 2006. (<http://www.fravahr.org/spip.php?article266>、2011年2月17日アクセス)
- , 2007, "Zoroastrian College Work: Your Help Needed," *Fravahr Organization*, May 30, 2007. (<http://www.fravahr.org/spip.php?article353>、2011年2月17日アクセス)
- Parsi Tari Arsi, 2010b, "National Minority Commission Report on the Parsis: Some Startling Findings," *Bombay Samachar*, April 18, 2010. (<http://www.bombaysamachar.com/new/ptadetails.asp?newsid=2588>、2011年2月17日アクセス)
- , 2010c, "National Minority Commission Report on the Parsis: Some Startling Findings," *Bombay Samachar*, May 2, 2010. (<http://www.bombaysamachar.com/new/ptadetails.asp?newsid=26040>、2011年2月17日アクセス)
- Pawar, Yogesh, 2008, "Mumbai Parsi Panchayat Election Heats Up," *NDTV.com*, August 10, 2008. (<http://www.ndtv.com/convergence/ndtv/story.aspx?id=NEWEN20080060846>、2011年2月17日アクセス)
- Pereira, Onaldo A, 2007, "Brazilian Zoroastrians in the World Social Forum," *Fravahr.org*, January, 15, 2007. (<http://www.fravahr.org/spip.php?article278>、2011年2月17日アクセス)